

ポルトガル修道女の手紙

山中 哲夫 訳

読者に

ポルトガルで公務についている一人の貴族に宛てた、五通のポルトガル語の手紙を翻訳したもののその正確な写しを、大変苦勞して、なんとか入手することができた。女性の感情に精通した諸氏が悉くこの手紙を賞讃し、あるいは懸命に探し求めておられるのを目のあたりにしてきただけに、これを出版することで、必らずや件の人々に喜んでいただけるであろうと信じている。この手紙を書いた本人の名も、その訳者の名も分つてはいないが、これら五通を公けにしても、なんら差障りはなからうと思われる。ただ手紙を歪めているかもしれぬ若干の印刷上のミスがなかったとは言い難い。

第一の手紙

わたしの恋心よ、おまえには本当に先を見通す力がなかった。ああ！不幸者！おまえはあざむかれたのです。ま

やかしのいろんな希望にあざむかれたのです。おまえがあれほど楽しい計画を立てたときの情熱も、いまでは、死にたくなるような絶望しかひき起こさない。それに比べられるのはただ、それをひき起したひとがいないという残酷さだけ。あなた様がいらつしやらないなんて。わたしの苦しみがそのことをどんなにたくみに忌まわしい名で呼ぼうと、忌まわしすぎるなんてことはないのです。ですから、もう永遠に、あれほどの愛情をのぞき見たあの面のまなこ、わたしに愛の感情を教えてくださいましたあなた様のあの面のまなこ、わたしは永遠にそれをみつめることはないでしょう。その愛の感情は、よろこびでわたしをいっぱいにし、あらゆるものと引きかえても惜しくはなかった、つまりわたしにはそれだけで充分だったのに、それなのに。なんということでしよう、わたしの目をかがやかせたただひとつの光もうばわれて、目はただ涙ばかり。あなた様がとうとうお去りになる決心をなすつたと知ったときから、わたしの目からはただ涙ばかり、ずっと泣きどおしです、だって、そんなこと、たえられません。すぐに自分死んでしまうと思えたほどですもの。けれども、あなた様おひとりがおあたえになった数々の悲しい事に、わたしはなにか愛着のようなものを抱いているようです。あなた様にお会いするや、わたしはいのちをあづけてしまいました。いのちをあづけたことに、いまではよろこびのようなものを感じています。日に千度も、この焦がれるようなため息を、あなた様のいらつしやる方角にもらしているのです。ため息はあなた様をもとめてあらゆるところをさまよい、けれども、これほど心を悩ませていますのに、その酬いとして、たったひとつの、それもあまりに露骨な知らせしかもたらさないなんて。これは自分の悲しい運命のせいです。残酷にもわたしにうぬぼれを許さないのです。運命はたえずわたしにこう言っかけてきかせるのです。——かわいそうなマリアンヌ、おやめなさい、むなしく身を焦がすのはおやめなさい、二度と会えない恋人をもとめるのはおやめなさい。あの人は海を渡っておまえからのがれ、フランスで悦楽のただ中において、おまえのくるしみのことなどひとときたりとも考えてはいないでは

ありませんか。あのときの夢中をことごとくおまえからうばい去り、しかもあの人はそれをおまえに感謝もしていないではありませんか。いいえ、違うわ。あなた様をそんなに侮辱的にきめつけようなんて、わたしにはできないことです。わたしはあなた様が正しいんだと思い、そう思いたくて仕方がないんです。あなた様がわたしのことをお忘れになったなんて想像したくもありません。ですが、ただの思いすごしで身を責め苛んでいるのなら、こんなに不幸でしょうか。不幸でないならなぜ、あなた様がわたしに愛の証しを示してみせようとして、いろいろ心をおくだきになったことすべてを、わたしが努めてもう思い出すまいとするのでしょうか。あのお心遣いのすべてにはほんとうにうっとりとなりました。ですから、あなた様の心のはげしさを証す数々をうれしく受けとつたとき、わたしの心のはげしさがあたえたその同じ有頂天の気持であなた様を愛さなければ、わたしは恩知らずということになります。どうしてあれほどうれしかった思い出が、これほど無慙になりえるのでしょうか。もともと思い出はそういうものではないのに。どうしてわたしの心を責め苛むのにしか役立たないのでしょう。ああ、あなた様のこのまえのお手紙のせいで、この心はへんな具合になってしまいました。気持がひどく昂ぶって、この身をはなれて、あなた様をさがしに行こう、行こうとしたのです。そんなふうなんです。そんなむちゃくちゃな心の乱れにまいってしまつて、三時間以上もわたしは放心状態になりました。やがて、あなた様のために無駄にしなければならぬような生活にはもどるまいと決めました。だって、あなた様のためにとっておいたんじゃありませんもの。ようやく、われにもあらず、一條の光をみつめました。わたしは愛する切なさで死んでいくだろうと、いい気を感じていたので。そのうえ、あなた様がいらっしやらないという悲痛の思いに、この心が引き裂かれるのを、もう見なくていいというのがとてもうれしかったです。こういうことのあつたあとで、たくさんの、いろいろないやな気持ちになりました。でも、あなた様にお会いできないかぎり、わたしにいつか苦しみのない日がくることがありましょ

うか。けれども、この苦しみはあなた様のゆえなのですから、愚痴などこぼさずにじつとがまんします。なんといふことです。それこそ、あなた様をあれほど愛おしく慕ったそのお返しに、わたしが受けとった酬いといふのですか。でも、そんなことはいいんです。一生涯、あなた様をお慕いつづけて、けっして誰にも会うまいと心に決めたのですから。はつきり申し上げます。あなた様もまた、誰をも愛さないがいい。わたしほどの燃える思いをもっていいおかたに満足なさろうとは思われません。おそらく、もっと多くの美しいかたに出会われるでしょうが（それでも昔、わたしにおっしゃいましたわね、わたしがとても美しい女だと）、これほどの愛情にはけっして出会うことはないでしょう。他のことはつまらないことです。恋しくて恋しくてたまらないのです。お手紙をください。いいえ、無意味なことでお手紙をいっぱいにするのは、もうやめてください。もう、自分のことを思い出してください。わたしに手紙を書くのはやめてください。あなた様を忘れることができません。あなた様がわたしといっしょに過ごすためにこちらにいらつしやるといふ希望をわたしに抱せてくれたことも、また。ああ、なぜあなた様は一生をわたしといっしょに暮らそうとなさらなかったのです。この情ない修道院から抜け出すことができるなら、あなた様がお約束になったことをポルトガルで待つなんてことはせず、なりふりかまわずあなた様をさがしにいき、あとを追い、あらゆるところで愛し、愛しつくすでしょうに。けれども、そんなことができるなんて、そこまでいい気に思い込んでいるわけではありません。確実ににかよるこびをあたえるような希望を育てていきたくもありませんし、もう、苦痛しか愛そうとは思いません。ほんとうのことを申しあげます、それなのに、わたしの兄があなた様に宛てて、お手紙を書く機会をあたえてくれたとき、やにわに、はげしいよろこびの思いがつきあげてきて、一時は、いまのこの不幸を忘れてしまったほどです。おねがいです。おっしゃってください。なぜあなた様はあんなふうにして、わたしの心をうばおうと一所懸命になったのです。わたしを捨てるおつもりだったのは、ご自身よ

くご存知だったのに。なぜ、あれほど夢中になって、わたしを不幸にしようとなすつたのです。なぜ、わたしを、自分の僧院にそつとしておいてくださらなかつたのです。わたしがなにかあなた様を辱しめるようなことをしましたでしょうか。いいえ、ごめんなさい。あなた様のせいではないんです。自分の復讐のことを考えてるんじゃないんです。ただ自分の境涯のひどさを自分に責めているだけなんです。別れ別れになって、あらゆる悲しみを蒙つても、わたしたちはそれをおそれることもできたかもしれないのに。もしそうしていたら、わたしたちの心をふたつにわかつこともなかつたでしょうに。愛は、運命よりも勁つよいものです。はなれたふたつの心を一生ひとつに結びつけたのです。少しでもわたしの生活を気にかけてくださるのなら、ときどきはお手紙をください。あなた様はそちらのお気持と暮しぶりをお知らせくださいだけのおかただと思っております。それよりも、そんなことよりも、会いにきてください。さようなら。この便箋はあなた様のお手のうちに落ちるでしょう。ですから手ばなしたくないのです。同じ便箋をあなた様といっしょに持ちたい。同じしあわせを。なんてばかなんでしょう。そんなことが不可能なことくらいよく知っているのに。この手紙がうらやましい。さようなら。もうだめです。もう書けません。さようなら。わたしをずっと愛してください。わたしに、さらにもっとたくさんのくるしみをあたえてください。

第二の手紙

この心の思いのたけを手紙に書きつらねてあなた様におつたえしようなんて、そもそもわたし自身の気持に手ひどく泥をぬっているようなものです。もし同じ熱い思いでそのことをお考えくださるなら、どれほどしあわせでしょうか。でも、あなた様におすがりしてはならないのです。わたしを不幸にした、そしてあなた様にとつても恥づべき忘却で、こんなふうになわたしを悪しざまにあつかつてはいけなかつたのです。こんなこと、申しあげたくなかつ

なのですが、でも、わたしはもっと手ひどく言い放ちたい思いです。けれども、少なくとも、あなた様がわたしと別れようと決心なすったのを知ったとき、確かに予期していた不幸な出来事をいまになって嘆きかなしんでいるんですもの、あなた様がほっておかれるのもあたりまえです。ふつうにひとの持つ以上の誠実な態度を持つてらっしゃると考えたとき、そのときわたしは思い違いをしていたのです。よく分っております。それというのも、この度を越した思慕の念が、ありとあらゆる疑いの彼方にわたしを運んでいったからです。この思いがふつう以上の貞節に働いたからです。けれども、わたしをあざむこうとするあなた様の思惑の方が、あなた様のためにしてあげたすべて、そのすべてのことのためにあなた様が踏まねばならない人の道よりも、結局はまさっていたのです。わたしが愛しているから、ただそれだけのためにわたしを愛してくだすっても、それでもやはり、わたしはきつと不幸でしよう。なにもかもみんなあなた様の愛情のせいだけにしたいんです。でも、いまは、そんな気持からはとてもとおい。六ヶ月の間、あなた様からは一通のお手紙も受けとっておりません。こんな悲しいことも、ひとえに、夢中になってあなた様に心を寄せた盲滅法な無分別のせいだと思っております。わたしのよろこびはこの愛よりも早く終ることになっていたのだと、見抜くべきではなかったのでしょうか。ポルトガルで一生お暮しになる、ご自分の今までの生活、お国のことはうちすてて、わたしだけのことをお思いになる、そんなことを心待ちにできたでしょうか。この胸のくるしみはどんな慰めも受けつけません。うれしかったときの思い出も、不幸のつらさでわたしをうづめてしまいます。なんとということですか。わたしの願ひものぞきもみな、無益なことになるのでしょうか。あなた様がわたしにお見せになったあのほげしい、ものくるほしい目で、もう二度と、この部屋でわたしをみつめてくださることはないのでしょうか。でも、ああ、わたしはきつと思ひ違いをしているのです。知りすぎるくらいよく知っています。この頭と心をいっぱいにしていた愛の感情が、あなた様のなかであおられたのは、ひとえに快樂のためで、

快樂が終ると同時にすぐ消えていったのです。あまりにしあわせすぎたあの頃、自分の理性に助けをもとめて、あのいきすぎた夢見心地をしづめるべきでした。いま蒙っているものすべてを、予感すべきでした。でもあのときは自分のすべてをあなた様にささげていたのです。あの歓喜をだいなしにするような、そしてあなた様の情熱の燃えるような証しを心ゆくまで身に感じるのを妨げるような、そんなことを思ってみる状態ではありませんでした。あなた様といっしょにいることに、あまりうっとりとなっていたので、いつの日か、あなた様がわたしからはなれておいきになるとは、考えることもできませんでした。それでも、ときどきあなた様にこう言ったのをおぼえております。あなた様はわたしを不幸にするでしょう、と。でもこのおそれは、やがて消えてなくなりました。あなた様のためにそんなおそれなど眼中になかったんです。それがうれしかった。あなた様の言葉に、その偽りの誓いに、われを忘れるのがうれしかったのです。この病いを治す薬はよく分っています。もうあなた様を愛さないことです。そうなれば、やがてはその病いから癒るでしょう。けれども、ああ／＼なんという薬でしょう／＼いいえ、いいえ、あなた様を忘れるくらいなら、いまよりもっと苦しんだ方がまだいい。ああ、でもそれは、わたしの思うままにならぬこと。ほんの一瞬、もうあなた様を愛すまいとねがったわたしですが、でもそのことで自分を咎めようとは思いません。あなた様は、わたしよりもさらに気の毒な人ですもの。フランスのご婦人方からお受けになる疲れ切った悦楽であなた様からかわいがられるくらいなら、いまくるしんでいるものでくるしんでいた方がましです。あなた様の冷淡さをうらやましいとは思いません。あわれだと思えます。わたしを忘れ切るなどできないでしょう。わたしなしでは、不完全なよろこびしか持てない有様なんでしょう。あなた様以上に心うばわれているんですもの、わたしの方がもっとしあわせです。先日、この尼僧院の門番の仕事を言いつけられました。わたしに話しかける者はみな、わたしが氣違いだと思っています。なんて答えたのか、自分でも分りません。修道女たちだって、同じよう

に気が狂つてるに違いありません。わたしになにか僧院の仕事ができると思ひ込んでいますもの。ああ、エマニュエルとフランシスコの幸運がうらやましい。なぜわたしは、あの二人のように、四六時中あなた様といっしょにいないのでしょうか。あなた様のあとに従つていったのに。きつと、もつと心をこめてお仕えしたでしょうに。この世ではなにもぞむものはありません。あなた様にお会いしたいということ以外には。せめて、わたしのことを思い出すだけでも。思い出してくださいさるだけで結構です。けれども、ほんとうにそれだけで満足できるか、自信がもてません。毎日毎日お会いしましたとき、わたしのぞみは、あなた様がい出してくださるだけではとどまりませんでした。でも、あなた様がおのぞみになることにはなんでも従わなければならないことを、あなた様は教えてくださいましたものね。いまでもおぼえています。けれど、あなた様をお慕いしたことには、少しの後悔の念も感じておりません。あなた様に惑わされたことが、ほんとうにうれしいのです。これはたまらないことですけれど、おそらく永遠にあなた様はこちらにはいらつしやらないでしょう。けれども、それでわたしの愛の狂おしい思いが弱まるなんて絶対にありません。そのことはみんなに知ってもらいたいです。隠し立てなどしやしません。あらゆる礼儀作法を破つて、あなた様のためにわたしにできることはなんでもしたということに、うっとりとなつております。一生涯、ものくるおしいまにあなた様を愛すということだけを、自分の信仰、自分の信仰としていくのです。だつて、いまはじめて、あなた様をほんとうに愛しはじめたのですから。わたしに返事を書かせようと思つてこんなことを言っているではありません。どうか、無理はなさらないでください。あなた様のまごころからつたわつてくるものだけをのぞんでいるのですから。あなた様が慎しむことのできるような愛の証しなど、全部、おことわりします。あなた様はおそらく、わたしにお手紙をお書きになる手間をお取りにならないことに、楽しみを感じてらつしやるのでしょから、わたしもそんなあなた様をゆるすことに、楽しみを感じることにしましよ。

あなた様の偽りすべてをゆるすことに、深い情愛をおぼえます。あるフランス人の下士官のかたが、けさ、思いやりの気持からでしょうが、三時間以上もあなた様のことをわたしに話してくださいました。そのかたは、フランスの講和が成ったとおっしゃいました。もしそうなら、会いにくることがおできになるではありませんか。わたしをフランスへ連れていけるではありませんか。でも、わたしはそれに値しない女です。どうぞ、お気に召すままなさってください。もうわたしの愛は、あなた様がどうわたしを扱いになろうと、そんなことには左右されません。あなた様のご発なすつてからこのかた、ただのひとときも、健康なときはありません。またどんな楽しみも。ただあなた様のお名前を日に千度もお呼びするときのほかは。あなた様が陥れたこの痛ましい有様を知っている何人かの修道女たちが、たびたびわたしにあなた様の話をするのです。できるかぎり、自分の部屋にじっとしています。あれほど何度もあなた様が来てくださったあの部屋に。そして、いつまでもあなた様の絵姿をながめております。あれそれは、この命より百倍も千倍も大切なもの。よろこびのようなものをあたえてくれるもの。けれども、同時に、おそらく二度とあなた様にはめぐり会えないだろうと考えていると、その絵姿がくるしくなってくるのです。おそらく二度とお会いできないなんて、どうしてそんなことがあるのでしょうか。わたしは永遠に、あなた様から捨てられたのでしょうか。マリアンヌは、もう、だめです。この終りにきて、気がとおくなつて。さようなら。さようなら。わたしをあわれと思し召して。

第三の手紙

わたしはどうなるのでしょうか。どうなればいいと思つてらっしゃるのですか。自分が思つていたこととはずいぶん違つてきました。お立ち寄りになるいろんな所からお手紙をくださるだろうと思つていました。そしてそのお手

紙はとても長いものだろうと思っていました。またお会いできるといふ希望でこの情熱を支えてくださり、わたしはあなた様の誠実さを信頼し切って、なにか心の平安のようなものを身に感じ、その間は、法外なくなるしみもなく、充分にたえられる身の上にあるだろうと思っていました。もし、あなた様がまったくわたしのことをお忘れになつたんだと、真底知ることができましたなら、ささやかでも、わたしにできる努力はなんでもして、この境遇から立ち直ろうとさえ考えたかもしれません。あなた様との今生の隔り、信仰心のぐらつき、あれほどの不眠と不安でまだいくばくか残っている健康もそこなわれてしまうのではないかとこの恐れ、お戻りになる気配がわずかもないと、あなた様の熱情と最後の別れのお言葉のひやかさ、ほんとうに卑怯卑劣な口実でご出発なさつたこと、その他もろもろのたくさんの理由、それはもつともな理由です、でもあまりに情ない。それでも必要なら、わたしには確かに救いを約束してくれるものになるでしょう。最後は自分自身とたたかうばかりです。自分のありとあらゆる弱さは疑いようもありませんが、今日くるしんでいるものを、怖いとも思いません。ああ、このくるしみの数々をあなた様と分かち合えないなんて、わたしだけがたつたひとりの不幸な女だなんて、なんてあわれなことでしょう。こんなことを考えると死にたくありません。わたしたちのよろこびのあれこれに、あなた様はけっしてはげしくお心を動かされはしなかつたと考えますと、こわくて死にそうです。ええ、そうです。あのお心のざわめきは、みんな嘘であつたのだと、いまははつきり知っております。わたしとふたりきりであるのが夢のようだとおっしゃるそのたびに、わたしを裏切つてらしたのです。あなた様の執心も熱情も、ひとえにこちらのしつこさのせいなんです。わたしをほのおと燃えあがらせるもくろみを、ひやかやくわだててらしたのです。わたしの燃える思いを、ただ一個の戦利品としてしか見てらっしゃらなかつたのです。この思いに、あなた様のお心が、深く動かされるなど、一度もなかつたのです。あなた様というおひとは、ずいぶん不幸な方ではないでしょうか。わたしの盲目の恋を

いいことにして、あんなふうにしかわたしを扱えないなんて、おもいやりのまったくないかたではないでしょうか。けれども、どうして、あれほどの愛情をもつてしても、あなた様を完全に幸福にしてあげられなかったのでしょうか。ただあなた様への愛ゆえに、あなた様が失った数限りないよろこびを悔むばかりです。このよろこびを受け入れたくなかっただなんて。ああ、もしこのよろこびを知っておいででしたなら、きっとそれはわたしをだましたよろこびよりもっと身に沁み入るものだとお感じになったことでしょうに。はげしく愛し愛されているときには、ひとははるかに幸福で、もつと心の琴線にふれるものを感じるものだと、きつと身をもつて経験なすつたでしょうに。わたしは誰なのか、何をしてるのか、何をのぞんでいるのか、自分にも分りません。たがいに衝突し合う千もの感情にひき裂かれています。これほど痛ましい境遇を想像できますか。もの狂おしいまでに愛しております。けれど、わたしと同じ狂おしさで愛してほしいなどは申しません。これはせめてものわたしの思いやりです。だって、あなた様がどんな心安まるときもなく、ゆれ動き、ゆれ返すばかりのお暮しをなすつて、たえず涙を流して、すべてがあなた様には忌わしいものと映るとしたら、わたしは自分で命を絶つてしまおうでしょうから。いえ、命を絶たなくとも、苦痛で死んでしまおうでしょう。自分のくるしみだけでもたえられませんが、千倍もつらいあなた様のおくるしみがわたしにあたえる悲しみに、どうしてたえられますでしょうか。そう言ってながら、わたしはまた、自分のことなどお考えにならないでほしいと心に決することもできないのです。素直に申しあげます。フランスで、あなた様に快樂をあたえるもの、あなた様のお心と好みに叶うもの、そのすべてにはげしく嫉妬しているのです。自分でも、あなた様にお手紙を書いている理由が分りません。ただ憐れみを受けるばかりだとはよく分っております。でも、あなた様からあわれんでもらいたくはありません。あなた様にささげたものを思い返してみますと、自分の気持ちに逆らって、ほんとうにうらめしくなってくるのです。わたしは体面を失いまし

た。両親の怒りに、この国の修道女にたいするきびしい戒律違反の罪にさらされています。そしてあらゆる不幸のうちでもっともひどいあなた様の忘恩の仕打ちに。それでも、身に沁みて感じてはいるのです。こんな良心の呵責もしんじつものではなく、あなた様への愛のためなら、もっとも仮借ない危険だって心から追い求めたかった、と。自分のいのちと名誉を危険にさらしたことに、いとわしいよろこびさえ感じている、と。わたしのもっとも大切なものでさえ、あなた様のお気持次第。あんなふうにもその大切なものを使えたのですから、わたしはうれいと思わなければならぬでしょう。ああ！あなた様だけで満足できるほどうぬぼれてはいないつもりですのに、自分の苦痛、自分の愛の極みだけでは満足してはいないようです。不実にもわたしは生きております。死のうとしてやっていることと同じだけのことを生きるためにもやっています。それが死にたいくらいに羞づかしい。するとわたしの絶望もただ手紙のなかだけのものなののでしょうか。あれほど何度も言ったその言葉どおりあなた様を愛しているのなら、とつくの昔にわたしは死んでいたのではないのでしょうか。あなた様をだましたのです。さあ、嘆いてください。あなた様の番です。ああ！なぜわたしをお嘆きにならないのです！あなた様がおたちになるのを見ていて、いつかお帰りになるなどは思えませんでした。それなのに、わたしは生きております。あなた様をあざむいたのです。おゆるしくください。いいえ、おゆるしにならないで！きびしくなさって！あなた様を思う気持がほんとうにはげしいんだなんて思わないで！もつと氣むづかしくなさって！ご自分への愛で死んでほしいとわたしにおっしゃって！どうか、この救いをわたしに授けてください。そうすれば、女であるこの弱さをのり越えて、この優柔不断さをしんじつの絶望でたち切ることができますでしょう。ひとつの悲劇的な最期が、否認なしに、たびたびわたしのことを考えさせることになるでしょう。わたしとの思い出はいとおしいものとなるでしょう。おそらく、ひとつの異常な死に、あなた様ははげしく心を打たれることでしょう。あなた様が陥れたいまの有様より、その方が

よほどましではありませんか。さようなら、あなた様には二度とお目にかかりたくはありません。ああ、痛切に胸にひびきます。この氣持がいつわりであることが分つています。あなた様に宛ててお手紙を書いているときには、はじめからあなた様にめぐりあわなかつたよりも、愛しながら不幸であつた方がどれほどいいか、ちゃんと知っているのです。ですから、不幸も泣き言もいわずに、自分の悲しい定めをあまんじて受けているのです。その定めをもっとしあわせなものにしてあげたいとはのぞんでらっしゃらないのですから。さようなら。わたしがくるしみの果てに死にましたら、愛情をこめてわたしを悼むと約束してください。せめて、わたしの情愛のはげしさで、あなた様がなにもかもいやになり、全部おそばから遠ざけていただけのならば。この慰めだけで充分です。たとえ永遠にあなた様を失わなければならないとしても、他の女のかたにあなた様を残したくはありません。わたしの絶望を利用して、ご自分をもっとすてきに見せ、この世にあるうちでもっとも大きな情熱のほのおを燃やさせたんだと見せびらかすんでしたら、あなた様というひとは、真底、残酷なひとということになってしまいます。もう一度、さようなら。あまりに長くなりすぎました。読むあなた様のことも考えずに。おゆるしくください。この頭のおかしい女に寛大であつてくださればと念じております。でもこの女も、あなた様にお会いする前は、そうではなかつたのです。ご存知でしょう。さようなら。自分のいまのたえがたい状態のことをあまりにしつこくしゃべりすぎたようです。それでも、心の底から、あなた様がひき起したこの絶望にお礼を申しあげます。あなた様と知り合う前に過ごしてきたあの穏やかさがいとわしく思われます。さようなら。わたしの情熱は日増しに強くなつていきます。ああ、他にどれほどたくさんのことを言いたいことでしょうか！

第四の手紙

さきほど部下のかたから、嵐であなた様がアルガルヴ王国に緊急に立ち寄られたと聞いたところです。海ではたいそうご苦労なすつてらっしゃるのではないかと案じております。あまりこの心配にとらわれて、自分のくるしみの方はもう忘れてしまいました。あなた様の身に起ることは、わたしによりも、ご自分の部下のかたに関わることだと思いでしょうか。なぜそのことをもつと詳しく部下のかたにお知らせくださらなかったんです。そして、なぜわたしにお手紙をくださらないんです。ご出発になってから、その機会がおりでなかったのです。ほんとうにわたしは不幸な女です。その機会がおりなのにお手紙をくださらないとしたら、わたしはもつと不幸な女です。あなた様の不義と不実はひどいものです。でも、それがなにかあなた様に災いをもたらすとしたら、それもわたしには涙の種となるでしょう。それでわたしが報いを受けるというのなら、むしろあなた様の無事安泰の方をずつとのぞみます。実はほとんどあなた様がわたしを愛してらっしゃらないことをはつきり告げるあらゆるものに、わたしはさからっているのです。少しもわたしのことを思ってくださらないことを嘆くあなた様ゆえの理由よりさらに、自分の夢中な恋心に身をまかせる自分の心情は、痛いくらいよく分っています。あなた様の仕打ちが、出会ったはじめの頃に、最近と同じくらいつれないものであったのなら、どれほど多くの氣遣いをしないですんだことでしょうか。けれども、あれほどの情熱を傾けて、わたしのようになまされたものがいたでしょうか。あの情熱をまごころからのものだと思わないひとがいたでしょうか。愛しているおかたの誠意を疑おうと長い間心に決めているのは、なんという胸ぐるしいことでしょうか。あなた様の方はちよつと弁解すればそれで充分です。けれども、そんなわずかの弁解もなさらないで、わたしの抱いている愛情をほんとうに見事に利用なさって、だからわたしは、自分

自身であなた様をゆるしてあげるといふ甘美なよろこびを知るためだけに、あなた様を罪深いひとだと思つてほかないのです。足繁くお通いになってわたしをご自分のものになさり、あの熱中でわたしを燃え立たせ、あの親切な振舞いでわたしを魅了し、誓いの言葉でわたしを安心させ、ついにわたしの激しい愛情は、わたしを惑わせてしまったのです。あんなにうれしかった、あんなにしあわせだった最初の頃。その結果は、ただ涙、ただため息、忌わしい死だけ。どんな救いも見つけることができずにいるのです。あなた様を愛しているときに、思いがけないよろこびを感じたというのはほんとうです。でもそのよろこびは代りに理不尽なくらしみと変つてしまつたのです。この心にひき起こされた動揺は尋常一様なものではありません。あなた様の愛を片意地になつて拒んでいましたら、もしわたしが苦痛と嫉妬の種になるものをあたえて、さらにあなた様を煽り立てようとしていましたら、もしわたしのなかに故意に作つた思いやりのようなものをお認めになつたら、つまり、あなた様にたいして抱いている自然な愛の感情——あなた様がわたしに教えてくださったもの——その感情に理性をもつて抵抗しようとしていましたら（たぶん、そういうたつた努力もいさむだだつたでしょうが）、あなた様は容赦なくわたしを罰することができます。ご自分の権利を行使できました。ですが、わたしを愛しているとおっしゃる以前から、あなた様はすでにわたしにはすてきなかたに見えました。はげしい情熱を身をもつて示してくださつて、わたしはほんとうにうつとりとなりました。くるおしくあなた様を愛することに身も心もささげてしまいました。でもあなた様はわたしのようには盲目ではなかつた。ではなぜ、わたしがこんなことになるのをだまつて見てらしたのです。あなた様にはただ煩わしかつただけかもしれませんが、いったいそんなわたしの一途の思いを、どうなさりたかつたのです。いつまでもポルトガルにいるわけではないとちゃんと知つてらしたのに、それなのに、なぜこれほど不幸にするためにこの地でわたしなどをお選びになつたのです。この国でおそらくもとききれいな女のかたを見つげられたはず

です。そのかたと違って、同じくらいお楽しみになれたはずですよ。そうでしよう。下品なものしかお求めにならないあなた様ですもの。そのかたも逢瀬の間中、まごころこめてあなた様を愛したでしょうし、あなた様もそのかたとどしたら裏切ったりつれないことをなさったりせずとも、きっぱり別れることができたはずですよ。こんな仕打ちには、相手の心に叶うことだけを思っている恋人のやることではありません。責め苛むことだけに心うばわれた暴君のすることです。ああ、あなた様のものになつていく心に、なぜこんなひどい仕打ちをなさるのです。もちろん、知っています。わたしがあなた様の寵愛を信じていると同じくらいに、あなた様はそれを信じてらっしゃらないのです。でもこの愛ののぞみがなかったなら、自分がなにか途方もないことをしていると気づかなかつたら、わたしと別れなければならぬあなた様の理由よりも、もっと大きな理由にだつて抵抗したでしょう。そんな理由もわたしにはほんのささいなものに見えたでしょう。あなた様のおそばからわたしをひきはなすことができるような、そんな理由などありません。それなのに、どこからさがし出してきた口実を使つて、あなた様はフランスへお帰りになつた。出帆しようとする船を、どうして出帆させておかなかつたのです。ご家族からお便りがきたと思ひますのに、わたしが自分の家族から受けた数々の責めをご存知ないのですか。あなた様はご自分の面子からわたしを捨てるおつもりになつたのです。わたしは少しでも自分の面子のことを考えたでしょう。ご主君に仕えなければならぬからだというのでしようが、わたしが耳にしたことがほんとうなら、あなた様のご主君はあなた様の手助けなど必要としていらつしやしません。おそばに馳せ参じなくとも、お咎めはなかつたでしょうに。

いっしょに生活を共にしてましたら、わたしはあまりにしあわせすぎたでしょう。でもどうしてもはなればなれにならなければいけない以上、せめて不実ではなかつたことを、わたしはよろこぶべきなのでしょう。この世のなにかへても、あんなに邪しな行いはしたくありません。なんという事です。わたしの心の底を、しんじつ知っ

て、それでも永遠にわたしをうっちゃって、わたしが抱くにちがない怖れ、もうあなた様は新しい情熱の生贄にするためだけに、わたしのことを思い出されるだけだというこの怖れに、わたしの身をさらそうというお心づもりなのですか。氣違ひ女のように愛していることは自分でもよく承知しています。けれども、自分の心の思いのはげしさを嘆いているではありません。この責苦には慣れております。千ものくるしみのただなかであなた様を愛して、愛することで見つけた楽しみ、よるこんで味っているこの楽しみがなければ、とても生きてはいけません。そんなことではなく、あらゆるものに感じるにくしみと嫌悪とで、たえず責め苛まれてとても苦痛なんです。家族も友だちも、そしてこの僧院もわたしにはたえきれません。会わなければならぬあらゆる人たちが、必要にせまられてしなければならぬあらゆることが、わたしにはいとわしいのです。自分の情熱を失うまいとやっきになつて、果ては自分の行動、自分の務めすべてが、みんなあなた様に関わることに思えてくるのです。ええ、そうです、あなた様のために自分の生活のことごとくを費したわけではないのなら、氣も咎めましょう。わたしの心をいっばいしているこれほどのにくしみ、これほどの愛がなければ、ああわたしはどうしてたでしょう。たえずこの心を占めているものよりも生きのびて、平穩な、けれども熱のない生活を送れるでしょうか。そんな蕊の抜けた、味気ない生活はわたしには向きません。みんなはわたしの性格や、生活態度や、身なりの変化に気づいております。母はそのことできびしくわたしに注意しました。それから次にはやさしく。なんと答えたかおぼえていませんが、わたしは全部母に打ち明けたようです。一番厳格な修道女たちですら、わたしのいまの境遇を憐んでくれました。それで、少しはわたしの身になって心を配ってくれるようにさえなりました。みんなはわたしの恋の思いに心動かされるといふのに、あなた様はいかかわらずひどい無関心のままだなんて、意味のない繰り返しかりのつめたいお手紙しかよこしてくださらないなんて。便箋の半分も書いてはありますか。早く書き

終えてしまいたいという様子がありありと見えます。ドナ・プリイトが近頃うるさくせき立てて、わたしを部屋の外へ出させるのですが、自分では慰めているつもりなんでしょう、バルコニーに連れ出されたこともありましたが、そこからは、メルトラの町が見えます。ドナのうしろからついて行つたわたしは、たちまち、残酷な思い出に胸をつかれ、その日はずっと泣きくれておりました。ドナはわたしを部屋に連れ戻して、わたしはベッドに身を投げました。立ち直る兆しのないことを、何度も何度も思いめぐらしました。くるしみを軽くするためにしていることが、かえってくるしみをかき立てるのです。さまざまな救いの手立てのなかにさえ、自分を傷つけるそれぞれの理由を見つけてしまうのです。あの場所で、あなた様がわたしを魅惑するような様子で、ときおりお通りになるのを見かけたものです。運命の日、わたしはあのバルコニーに出ておりました。その日から、この不幸な情熱が最初にもたらしたものを感じはじめたのです。こちらのことをご存知なかつたとはいえ、あなた様はわたしの気に入ろうとつとめてらっしゃるように思えました。それでわたしは、いっしょにいた修道女たちのうちで、特別わたしがお目にとまったのだらうと思いました。立ちどまられたとき、わたしがつとよくあなた様を見ようとしているのが、とてもあなた様をよろこばせているように思えました。お馬を進ませていらつっしゃるときなど、その手綱さばき、その優美さに見とれておりました。走りにくい道をお通りになるときは、思わずひどい心配で胸をつかれました。とうとう、あなた様の行動すべてがひそかに気にかかるようになり、あなた様はわたしをにくからずお思いになつてらつしゃると感じて、あなた様がなされる振舞いをみんな自分にいいように解釈していたものでした。その結果がどうなったか、知りすぎるくらいよく知っております。別に遠慮をする必要はなにもないですけど、でも、いま以上にあなた様を罪あるひとにするのがこわいし、また、むりやりわたしに忠実なひとにしようとしてあれほどの努力をしてきたことで自分を責めるのもこわいですから、その結果のことは書きません。あなた様は忠実にはなら

ないおひとです。こんな手紙やこんな非難で、あの愛情と献身があなた様のあだし心になしえなかったものを、期待できませんでしょうか。自分の不幸はあまりにあきらかです。あなた様の理不尽な仕打ちは、そのことを疑うささいな理由もわたしには残してくれませんでした。わたしをお捨てになったのですもの、わたしはいまこそすべてを理解しなければならぬのです。あなた様はわたしにだけすてきなおひとでしょうか。他の女のかたの目にもすてきに映らないでしょうか。他の女のかたの気持を通して自分の気持がもつともだと分つても、わたしはそれを不満には思わないと思います。むしろ、フランスの全女性があなた様をすてきだと思ってくれたらとねがっているくらいです。そして、誰もあなた様を愛さず、誰もあなた様のお心に叶わなければ、と。ばかげた考えです。ありえないことです。けれども、わたしは身をもつていやというほど知りました。あなた様はひとを全身全霊で愛することのできないおかたです。どんな助けも借りずにわたしのことを忘れることのできるおかたです。新たな情熱のほのおで縛られることのないおかたです。あなた様がなにか納得のいく口実をもつたらとねがつているのでしょうか。そんな口実があれば、わたしはいまより不幸になるでしょうが、あなた様はこれほど罪深くはないでしょうに。フランスにいらっしやって、大きな楽しみはなくとも、それでもずつとこのびのびしてらっしやることはよく分っています。長旅の疲れのことや、さまざまな雑用、わたしの思慕の思いに答えないので怖いということ、そういうものがその地にとどまらせているのです。ああ、わたしのことなど、お気づかいにならないで、気になさらないで、いらしてください。ときどきお会いするだけで、あのとときと同じ場所にふたりでいるのを感じるだけで、それだけで満足なのですから。けれど、あさはかにも、わたしは思い違いをしているのでしょうか。わたしの好意よりも、他のかたの手きびしさ、厳格さの方が、もっとあなた様のお心にふれるのでしょうか。けんもほろろにあしらわれて、かえって恋のほのおを煽られるなんて、そんなことがぜんたいあるのでしょうか。でも、はげし

い恋の火のなかにはいる前に、よくお考えになってください。わたしの法外なくなるしさを、この決心の変わりやすさのことを、さまざまにゆれ動くこの気持のことを、常規を逸したこの手紙のことを、そしてわたしの信頼、わたしの絶望、わたしの願い、わたしの嫉妬のことを、ああ、あなた様は不幸になろうとしている。せめて、あなた様ゆえにくるしんでいることが、あなた様にむだではありませぬように、五、六ヶ月前、わたしにづらい打明け話をなさいました。お国で、あるご婦人を愛していたと、素直に告白なさいました。そのかたがひきとめてらっしゃるのなら、そのことをありのままお知らせください。これ以上わたしがくるしまないためにも。まだいくばくかの希望に支えられています。その希望を完全に失ってしまえば、そして自ら命を絶てば（たとえそれがどんな結果ももたらさないとしても）、わたしはほっとするでしょう。いいおかたの絵姿をそのかたのお手紙といっしょに送ってください。そのかたがあなた様に言ったこと全部を、わたしに手紙で教えてください。おそらくわたしはそこに自分を慰めるものを見つけ出すでしょう。あるいは、さらに自分を責め苛むものを。こんな状態にはこれ以上いることはできません。ここまでくれば、どんなまわりの変化もみんなわたしには好都合というものです。お兄様と義理のお姉様の絵姿もほしいんですけれど。あなた様に大切なものは、みんなわたしにもいとしいものなのです。あなた様に関わるものすべてに、全身全霊まごころを尽しているんです。自分のことなどどうでもよいのです。あなた様から愛されてらっしゃるおかたに仕えようと思えるほど、それほど自分が従順に思えるときもあります。ですが、あなた様の悪辣な仕打ち、あなた様の侮りにあまりに打ちのめされて、ご不快な目にあわせずにあなた様に執着できるなんて、あえて考えることもできないほどでした。あなた様を責めるなんてこの世でもっとも大きな間違いを犯しているのだと信じたほどでした。あんなふうに激情にかられて、あなた様がお認めにならないお心のうちを、あなた様に示して見せるべきではなかったのです。ずっと前から下士官のかたがあなた様宛のわたしの手紙

を待っておいでです。不愉快なく受け取ってもらえるように書くこうと思つていたのですが、手紙はあまりにまじりのつかないものになつてしまいました。もう終りにしなければなりません。ああ、そうしようとしても、それはわたしの力の及ばないこと。あなた様に宛てて書いているときには、まるであなた様に話しかけているみたいなんです。目の前にいらつしやるみたいです。次のお手紙はこんなに長く、こんなにしつこくはならないでしょう。ご安心なさつて、開封してお読みになってください。もうお手紙をくださいとは言いません。ほんとうに、あなた様を不快にする情熱のことなど、お話すべきではなかったのです。そのことはもうこれくらいにしておきます。つれなくあなた様から捨てられて、あと数日で一年になりますわね。わたしの好意がかえつてあなた様をすげなくはねつけて、五百里も旅をさせ、わたしからはなれさせるために難破にさらしたなんて、これまで考えてみたこともありませんでした。でも、わたしが、それでもこんな扱いを受けるいわれはありません。わたしの羞づかしさや、惑い、乱れを思い出されることもありましようが、ご自分の意に反してわたしを愛するようにしむけたものを、思い出されることはないでしょう。いつもこの手紙をあなた様のもとへ持つていかれる下士官のかたから、出発したいという四度目の催促がきました。なんて急いでいるのでしょうか、この国でどこかのあわれな女を捨てていくのでしょうか。さようなら。この手紙を終えるのがつらいのです。それはわたしと別れるときのそちらのつらさ以上です。でもその別れはおそらく永遠。さようなら。もう甘美な千の言葉を書きつらねることも、思い切り自分の感情に身をまかせすことも、あえてわたしはしません。愛しております。このいのちより千倍も。自分で思つているより千倍も。わたしにはなんて大事なかたでしょう、なんて残酷なおひとでしょう、お手紙もくださらないなんて。言いたくなくてもまた言わずにはおれません。またあらためてお便りします。下士官のかたが発言なさいます。出発したつてかまわない。あなた様によりも自分にむかつて書いているんですもの。自分のくるしみを軽くし

ようとしているだけです。実際また、わたしの手紙の長さにおそれをなして、お読みにならないでしょうし。こんなに不幸だなんて、いったいわたしがなにをしたというのです。なぜわたしの生涯を悲しいものにしてしまったのです。なぜ、わたしは他の国に生まれてこなかったんでしょう。さようなら。おゆるしくください。もう愛してくださいなどはおねがいしませんから。この運命でわたしの命が最後になるかどうか、ごらんになっていてください。さようなら。

第五の手紙

あなた様にお手紙を出すのもこれが最後です。いままでと違ったこの手紙の言葉遣いや調子から、あなた様ごもはやわたしを愛して、だからわたしももう愛すべきではないと、ようやくあなた様がわたしに思い知らせてくださいました。あなた様ごも、あなた様ごに知っていただけだと思えます。ですから、まだ手元に残っているあなた様ごものは全部、次の便があり次第お返しいたします。また手紙がくるのではないかと心配なさらなくて結構です。小包にはあなた様ごのお名前も書きません。詳しい話をドナ・ブライトにしました。彼女にはほんとうに勝手の違う打明け話でしたけれど、もう慣れております。彼女の方がわたしより確かでしょう。万事用意周到にやってくれて、わたしがいただいた絵姿と腕環をあなた様にちゃんと返してわたしを安心させてくれると思えます。けれども、わたしにはあれほど大切だったあなた様の愛のしるし、これらの品を、数日前から、焼き捨てたい、ひきちぎりたいという気持ちでいるのを知っていたのです。でもあれほどの弱さを見せてしまったわたしです。そんなだいたいそれができるようになったなんて、けっしてお信じにはならないでしょう。ですから、これらの品を手放さうとして感じた苦痛を、いまはむしろ楽しんで、あなた様にくやしい思いをさせてやりたいのです。恥を忍んで白

状況いたしますと、口で言う以上に、このつまらない品に執着して、自分はもうあなた様には心をかけていないと思
い込んだときですら、ひとつずつ手放すことに、そのたびにいろいろなことを思いめぐらしている自分に気づいた
のです。けれど人というものはずいぶん冷静に自分ののぞんでいることを徹底してやれるものです。わたしはドナ・
ブリイトの手にこれらの品を渡しました。この決心をするのに、どれだけ涙を流したことでしよう。あなた様のご
存知ない千もの迷いとためらいの果てに、それは詳しくお伝えはしません。その果てにドナに頼みました。けっ
して二度とその品のことは話さなくておくれ、わたしに返さなくておくれ、たとえ一目でもいい、もう一度見たい
からとわたしが頼んでも、返さないでおくれ、そして最後に、わたしには知らせずにそつとあのかたに送り返して
おくれ、と。

立ち直るためにあらゆる努力をしようとしてはじめて、つくづく自分の愛の深さを知りました。あれほどの困難
やげしさを予見することができていましたら、あえて立ち直ろうなどとはしていなかったのではないかと思いま
す。どんなにあなた様が薄情なおかたであつても、永久にお別れするよりも、そんなあなた様をお慕いしました
方が、この気持はずっと楽でございます。あなた様よりも、自分の愛の強さの方がいとおいしいのです。いわれない
あなた様のなさり様があなた様というひとをにくいものにしてからというもの、わたしは奇妙にこの思いを抑えつ
けることができないうのです。

女のいつもの高慢さも、あなた様のお心にそむく決心をしようとするこのわたしを助けてはくれませんでした。
ああ、わたしはあなた様の侮辱にくるしんできました。あなた様の嫌悪、他の女のかたに抱いてらっしゃるかもし
れないご執心があたえる、あらゆる嫉妬の思いにじつとたえてきたのでしたら、わたしは少なくとも自分の情熱を
抑えつけることができたでしょう。けれども、あなた様の冷淡さはわたしにはたえられませんが、先日のあなた様の

お手紙にあったあの友情を誓う失礼なお言葉やばかげた丁寧さを見て、あなた様に宛てて書いたものは全部お受け取りになっていながら、どのようにもお心を動かさず、それでも全部お読みになったのだと知りました。恩知らずノ自分の手紙が必ずあなた様のところに届き、お受け取りになるだろうと思う、そんな自分に絶望するほど、それほどまだわたしは恋に狂っているのです。あなた様の素直さを恨みます。いったいわたしが、素直にほんとうのことを言ってほしいなんて頼んだでしょうか。なぜ、あとにわたしの情熱などを残してくれたのです。手紙などお書きにならないければよかったです。ただそれだけで。ほんとうはお心のうちなどはつきり知ろうとはしていなかったのです。わたしをだましつづけて、もう言訳などしないようにさせてあげられなかったなんて、わたしはきつとあわれな女なのでしょう。あなた様はわたしのどんな思いにもふさわしくないおかた、わたしがあな様の不人情な人柄を肝に銘じていることを知ってください。けれども、もし、あなた様のためにしたことがすべて、お頼みしている赦しをささやかでも考慮してください。ささやかなものでしたら、どうか、もうわたしにはお手紙など出さないでください。きつぱりとあなた様を忘れることに力をお貸してください。この手紙をお読みになって、なにか胸をつかれるものを感じたと、ささやかでもわたしに明してくださいますのなら、おそらく、あなた様のおっしゃることはなんでも信じると思えます。でも一方では、そんなふうには白状なさり同意なさっても、それはまた怨みと怒りをあたえるものになるでしょうし、それでわたしをさらに燃え立たせることになるでしょう。ですからわたしの振舞いには関わり合にならないでください。そうでないと、どんな形で関わるにしても、おそらくあなた様はわたしの目論見をめちゃくちゃにしてしまうでしょうから。この手紙がどんな結果をよぶか、そんなことは知りたくありません。どうか自分のためにしている心の準備を乱さないでください。わたしを不幸に陥れようとしてどんなことをなさったにしても、わたしにもたらしたさまざまなくなるしみだけで満足できるかただと思えます。わ

たしの優柔不斷さをうばわないでください。ときがたてば、それでなにか心静かなものを得るだろうと思つて居るのですから。お約束します、あなた様をにくむことはいたしません。あえてにくもうとしても、いまはそんなはげしい感情など信じておりませんから。この国で、きつと、もつと誠実ですてきな恋人を見つけ出せるだろうと思つております。けれど、ああ、誰がわたしに愛情を抱かせてくださるでしょうか。他のかたの情熱が、この心を占めるでしょうか。といつて、わたしの情熱が、あなた様になにかもたらすことができたでしょうか。感じやすくなつたひとつの心が、それまで知らなかった、それでも抱くことのできた幾多の愛の夢中を、この心に気づかせてくれたものを、けつして忘れないものだ、わたしは身をもつて感じているのです。また、その恋慕の思いはことごとく、心に抱いた偶像につよく惹きつけられるものだといふことも。はじめてわきあがった思い、はじめて蒙つた傷は、いやされることも消え去ることもないといふことも。また、その救いのために注がれた情熱が心をいやし満ちたそうと努めても、もう見つかからない恋心などあてにはできないといふことも。そして、見つけ出せるようなどんなのぞみもなく、空しく心が求めているよろこびは、ただ、さまざまな痛恨の思い出ほどいといふものはないと、はつきり心に教えることにしか役立たないのだといふことも。なぜあなた様は、永遠につづくはずもない愛の思いの不完全さ、不快さを、そしてはげしい愛がたがいのものでないときの、はげしい愛のあとにつづくこの不幸を、わたしに教えてくださつたのです。そしてなぜ、なぜ、盲滅法の愛情と残酷な運命は、いつもわたしたちを、他のひとに心動かすような人間に仕立てようとするのでしよう。

たとえ新たな契りになにか心慰められるものを期待できるとしても、また、誠実なひとをみつけれられるとしても、わたしは自分があわれでならないのです。そしてこの世で最低のおひとを、その人から陥られたと同じ状態にするのに、わたしは大きなためらいを感じるのです。なにもあなた様を思いやる必要はないのですけれど、たとえ復讐

がわたし次第であっても、予想もできない自分の心変りによって、手きびしい復讐をしようとしても、とても決心がつかないだろうと思います。

いま、わたしはあなた様をゆるそうとしています。一介の修道女が魅力的だなんて、そんなことはないときよく承知しております。ですが、いろいろ理窟を言って選ぶことができませんなら、他のご婦人方よりも、むしろ修道女たちにひとは心惹かれるものだろうと思います。修道女たちが四六時中、自分たちの熱い思いのことを考えるのを妨げるものは、なにひとつございませぬ。みなのお気を紛らし、心を占めているたくさんのことで、彼女たちが氣をそらされることはありません。世に愛されているかたがたが、いつも多くのつまらぬものに心を失っているのを見るのは、ほんとうに不快なものです。上品でこまやかな心が少しでもあつたら、そんなご婦人方が茶話会や衣裳や散歩のことしか話題になさらないのは、とてもたえられないことです。ただ失望するばかりです。たえず新らたな嫉妬にさらされているわけです。いろんな氣遣いや親切、会話に感謝していいのです。そういう際に、ご婦人方があるな楽しみも感じていない、いつもひどい嫌悪の念で夫をたえしのんでいて、どんな心の一致もないなんて、誰が断言できましよう。そんなことを断言しない恋人を、自分に語られたことはなんでもやすやすと、またこだわりなく信じる恋人を、そんなご婦人方の儀礼にすぎないものをとても穏やかな信頼の眼差しでなめる恋人を、どうしてご婦人方は疑わなければならないのでしょうか。でも、あなた様がわたしを愛すべきだったと、正当な理由をもって明かそうとしているのではありません。それはひどく意地の悪いやり方です。それよりずっとましなやり方を使ってきましたのに、わたしは成功しなかつたんですもの。自分の定めをのり越えようとするには、あまりにこの定めをよく知りすぎています。生涯、わたしは不幸でしょう。毎日毎日あなた様にお会いしていても、そうではなかつたでしょうか。わたしに誠を尽してくださいださなかつたという怖れで死にそうでした。四六時中お会いしたかつた。

でも、できないことでした。この僧院にはいるときにあなた様がおかした危険には、ほんとうにびっくりしました。軍隊におはいらになったときには、生きた心地もしませんでした。美しくもなければ、あなた様にふさわしくもないので、絶望したものです。自分の身分の平凡さをこぼしたものです。わたしに抱いてらっしゃるように見えた愛着の念で、なにかあなた様が間違っても犯すのではないかと案じたりもしました。それほどあなた様を愛しているようにも思えませんでした。あなた様のために、両親の怒りをおそれていました。そしてついに、いまのあわれな状態になったのです。もし、もうポルトガルにいらっしやらなくなってから、ご自身のはげしい思いをいくばくかでもわたしに示してくださいたら、できるかぎりの努力をして、わたしはこの状態から抜け出そうとしていたことでしょう。身をやつしてあとを追いかけたでしょう。でも、ああもしフランスまで行って、あなた様がわたしを意に介さなかったとしたら、わたしはどうなっていましたでしょう。なんとこの狼狽／＼という路頭の迷い／＼家族にたいするなんとという恥のうわめりでしょう／＼もうあなた様を愛さなくなってしまうから、とても大事なわたしの家族／＼よくごらんになってください。わたしは実際よりもっとあわれむべき女かもしれないと、ひややかに自分ながらよく承知しているのです。少なくともいまは、生涯に一度、まともにお話しているのです。わたしの自制しているのがお気に召せば／＼そんなわたしに満足していただければ／＼そんなこと、知りたくもありません。もうお手紙は出さないでくださいとおねがいしたんですもの。もう一度、おねがいします。

あなた様はただの一度も、わたしをもてあそんだそのやり口のことをお考えになったことはないのでしょうか。この世の誰よりもわたしに恩を受けているとお考えにはならないのですか。気違い女のようにあなた様を愛してきました。あらゆるものとひきかえに、なんと多くの侮蔑を受け取ったことでしょうか／＼あなた様のやり口は立派な殿方のもではありません。きつとわたしに本心からの嫌悪を感じてらしたに違いありません。ものくるおしいま

で愛してくださらなかったのですから。わたしはただ月並な肩書にまいていただけです。あなた様はどんなふうにしてわたしの心をとらえたのでしょうか。どんな犠牲にわたしをさらしたのです。ほかの数知れない快楽を求めておいでではなかったといえるでしょうか。賭事や狩りをおやめになったでしょうか。まっさきに軍隊におはいりになり、一番あとに除隊なすつたではありませんか。わたしの愛のためにご自愛なさるようにとお頼みしたのに、あなた様は夢中になつて行軍なさいました。ご自分が高くお認めになられたのに、そのポルトガルに腰を落着ける手立すら求めようとはなさいませんでした。お兄様のお手紙を受け取つておたちになるとき、一瞬もためらわずにおたちになりました。旅の間じゅう、めつたにない上機嫌でいらしたということを、わたしが知らないと思ひですか。死ぬほどにくんでいると告白せずにはおれません。ああ、自分で自分にあらゆる不幸を招いてしまったのです。はげしい情熱をいきなりあなた様におしつたのです。あまりに馬鹿正直に。でも、愛してもらうには技巧が必要で。なにか巧みなやり方で、ほのおと燃えあがらせる手段をもとめなければならぬのです。愛一筋では、愛情はもらえません。わたしが愛するようにと、あなた様は計画をお立てになり、うまく成し遂げるためにはどんなことでもなさいました。必要とあれば、わたしを愛そうとさえなさいましたでしょう。けれど、情熱がなくともこの企てはうまくいくとご存知でしたし、しかもそんな企てをわざわざする必要もないということもご存知でした。なんとという仇心ノなんの咎もなくわたしをだましおせたとお信じですか。はからずもまたこの国においてになったら、あなた様にはつきり申しあげます、両親の報復の手にあなた様をお渡しする、と。長い間、さみしい思いで生きてきました。その思いがいまはこわく、良心の呵責でたえられないほどきびしく責め苛まれております。あなた様の犯した罪の恥づかしさを痛切に感じております。そしてもう、ああ、その罪の法外さを隠そうとする情熱も、わたしはもっていません。いつになったらこの心はひき裂かれないですむのでしょうか。いつになったら、この

八方ふさがりから抜け出せるのでしょうか。ひどいひと、それでも、あなた様が不幸になればいいとねがっているのではありません。幸福であれば、その方をねがうでしょう。でもあんなに立派なお心をもってらっしゃるあなた様が、そうなれるのでしょうか。別に一通お手紙を書いて、そのうちわたしが落着いて穏やかに暮していることをお知らせしたく思っています。もうあれほど痛々しく理不尽な仕打ちにくるしまず、あなた様をさげすんでいると、あなた様の裏切りについては平気な気持で語られると、あのときのよろこびやくるしみのことなどすっかり忘れてしまったと、そして自分が思い出そうとするときだけあなた様のことを思い出していると、そういうことをあなた様にお知らせできるようなったとき、あなた様のあの仕打ちを責めることができれば、なんとうれしいことでしょう。あなた様がわたしの弱味をにぎってらっしゃって、わたしに情熱をかき立たせ、分別をなくさせてしまったというのは、なるほどその通りです。でも、そんなことは自慢になりません。わたしは若かったんです。信じやすい女でした。子供の頃からこの僧院に入れられて、うんざりする人ばかりにしか会わなかったんです。ですからあなた様がたえずわたしにおっしゃったほめ言葉など、かつて一度も聞いたことはなかったのです。あなた様のおかげで、自分の魅力や美しさを知ったようなものです。あなた様を褒める言葉を耳にしましたし、実際みんなわたしにあなた様のことを良く言いましたし、そのうえ、わたしに愛を呼び起こすに必要なことはなんでもなさいましたから。でもようやく、いまのいまになって、この熱中夢中の恋狂いからさめました。あなた様が大きな救いをあたえてくださったのです。本当を言えば、それがとても必要だったのです。お返しするお手紙のうち、最後の二通は大切に手元に残して、前にお手紙を読んだときよりもっと何度も読み返すことでしょう。二度と自分が弱くならないようにと思つて。ああ、なんと高くついたことでしょう、いつも愛していたことを許してくだすつたら、なんと幸福だったことでしょう。わたしはまた自分を責め、あなた様の不実のことを考えています。承知の上です。でも

おぼえておいてください。わたしはもつと心の休まる身になろうと自分に約束しています。そうなると思います。あるいは、自分の意に反して、極端な解決の仕方をするかもしれませんが、でもそのことをお知りになっても、不愉快にはお感じにならないでしょう。あなた様からはなにもぞむものはありません。わたしは氣違ひ女です。こんななたびたび同じことを繰り返しているんですもの。あなた様ときっぱり別れて、もうあなた様のことなど考えないことです。お手紙を出すことももうないと思います。だって、このさまざまにゆれ返す心のひとつひとつをわたしはまだつぶさにご報告しなければならぬとでもいうのですか。

『ポルトガル文』の謎

—— 解題にかえて ——

山 中 哲 夫

わが国では佐藤春夫訳『ぼるとがるぶみ』として名高いこの手紙は、一六六九年にバルバンによって出版されるや、フランス国中で大変な評判となった。またフランス国内のみならず、外国においても種々の翻訳が出た。もちろんポルトガル語にも訳し直され、現在でもポルトガル文学において『ウズ・ルジアダス』(一五七二)と並び称せられる傑作としてその地位を保っている。一六七八年に英訳本が出たが、これが世界で十六番目の翻訳であった。英訳本は一八九三年に『ポルトガルのある尼僧の書簡』(*The Letters of a Portuguese Nun*)という表題でプレステイジが決定版

を出したが、佐藤春夫が訳出したのはこの版によってである。

この手紙の成功は当然のことながら様々の類似の手紙類を生んだ。続篇も出た。また相手の返事の手紙も出版された。もちろんこれらの手紙はもとの『ポルトガル文』とはなんら関係のない作爲的なものであった。

バルバンが『仏訳ポルトガルの手紙』(Lettres portugaises traduites en français) という題で出版したあと、ケルンとアムステルダムで異本が出たが、アムステルダムのF・ロジェ版では『シュバリエ・ド・Cに宛てたポルトガル修道女の恋文』(Lettres d'amour d'une religieuse portugaise écrites au chevalier de C***)と表題が変えられ、この恋文の相手シュバリエ・ド・Cとは何者であるかが議論の対象となった。

やがてこの人物はシュバリエ・ド・シャミリーであり、訳者はキュイユラーグ(Cuilleraguc)であることが公けにされた。シュバリエ・ド・シャミリーは別名サン・レジェ伯爵と呼ばれたフランスの将校で、後に元帥となった人物である。受取人がシュバリエ・ド・シャミリーである最大の証言は、サン・シモンによってなされた(その妻はシャミリーの後妻と親しい間柄にあった)彼は一七一五年にシャミリーの死に際して次のように記した。《大きな太った立派な体格の男で、才能と武勇にきわめてすぐれ、グラウヴ攻防戦で有名となった。何度もあちこちで彼の噂話がなされた。(……)彼は若くしてポルトガルで公務につき、そこで知り合い、彼に恋い焦れたある修道女から、かの有名な『ポルトガル文』を受取った。彼には子供はいなかった》²⁾

手紙の相手はこれで決着がついた。議論は手紙の主に移った。五通の恋文を書いたこの修道女はいったい誰であるのか。十九世紀に入って、ボワソナードが注目すべき報告をした。訳者がキュラーグ(Cuilleragues)もしくはシュブリニーであることはすでに周知のことであったが、ボワソナードは謎の修道女について次のように述べた——《私が所有している一六六九年版の本には、見知らぬ者の手で次のようなノートが記されている。「この手紙を書いた修

道女は名前をマリアナ・アルカフォラダと言い、エストラマドラとアンダルシアの間のベジャの町の修道女で、この手紙の受取り人であるシュバリエは当時サン・レジェ伯爵と呼ばれたシャミリー伯爵であった」この「ボワソナー・ノート」によって一躍、手紙の主の实在がリアリテイをもって浮び上がった。

その後、ジョゼ・マリア・ド・スウサ・ポテルロによって『ウズ・ルジアダス』風の古い語法が指摘されたり、ヘルキュラノによってこの手紙がポルトガル修道女によって直接『フランス語で』書かれたと指摘されたり——その意味では刊行者の言葉《読者に》の虚偽を指摘したことになる——、あるいはカステロ・ブランコがベジャのコンセプション修道院に、この手紙が書かれた時代に、マリア・アンナ・アルコフォラダ (Maria Ana Algorado) という修道女が実際に生きていたと証拠をあげて証明したりした。一八九〇年に『ポルトガル文』研究の權威リュシアノ・コルデイロによって、マリアナ・アルコフォラダに関する新資料が刊行され、この修道女は一六四〇年四月二十二日洗礼を受け、一七二三年七月二十八日に死んだことも分った。また彼女の打ち明け相手ドナ・ブライトの存在も確認された。

このように十九世紀における一連の研究によって、はじめに述べたように、『ポルトガル文』はポルトガル文学の傑作として位置づけられ、フランスでは翻訳部門のポルトガル文学の項に入れられていた。

謎はすべて解かれたかに見えた。

ところが二十世紀に入って、F・G・グリーンによる《読者に》(バルバン)に対する反対意見が出された。彼はまずこの手紙が評判を呼んでいた当時、すでにこの手紙の信憑性を疑っていたゲレの『サン・クルーの散策』から次のような一節を引用した。(この本がこれだけ売れた理由は) 目新しいという魅力からで、皆が修道女の恋文を読むことに楽しみをおぼえたからにすぎません。どんなふうにかかれてあってもよかったです。この表題が、読者を驚

かそうとした出版者の作爲的な操作であつたことなど考えもしないで」さらにグリーンはシャミリーが当時シュバリエの称号を持つていなかったことを証明した。彼はまた、テキストとマリアナ・アルコフォラドに関する先の資料との矛盾を指摘した。(1)資料によるとマリアナは古い貴族の出だが、テキストの修道女は貴族出の娘にはふさわしくない扱いを受けている。(《自分の身分の平凡さをこぼしたものです》「第五の手紙」)(2)実在のマリアナがシャミリーと出会つたと思われる頃にはすでに母は亡くなつていて、彼女はひとりの妹の世話に追われていた。これはテキストに反する。(3)メルトラの見える修道院のバルコニーのことが語られているが、実際にはベジャのコンセプション修道院から五十キロも離れているメルトラを望むことは不可能である。(4)《エストラマドラとアンダルシアの間のベジャの町》という表現は間違つている。ベジャはそこにはない。

なによりもグリーン最大の功績はパリ国立図書館に保管されていた出版物に関する国王の允許(いんきよ)原簿にオリジナルの許可証のコピーを発見したことである。そこには次のように記されている——《本日、一六六八年十一月十七日、一六六八年十月二十八日にマルジュレ副署による、ギユラーグの『ヴァレンタイン、ポルトガルの手紙、エピグラム、およびマドリガル』と題する書物に対して与えられた国王の允許が公けにされた》

ここでにわかに贋作説が有力になつた。G・ロドリゲスはスキュデリー嬢を引用しつつ、ポルトガルの田舎で実際に書かれた手紙から作者(ギユラーグ)は想を得たのではないかと折衷的な解釈を示した。本国(?)のポルトガルでも最近になつて、マリアナ・アルコフォラドはフランスで出版されたような手紙はおそらく書かなかつただらう、と贋作説を支持する論文が出た。それでもさすがに、モデルとなつたポルトガル女性の強い愛の魂がなかつたならば不完全なものになつていただらう、という註釈をつけている。

しかしフランスでは、A・アダン(『フランス文学史』第四卷、一七〇頁以下)、V・L・ソーニエ(ジャック・オー

モン版『ポルトガル文』の解題)を除いては、それでも簡単には武装解除しなかった。ラ・ブリュイエール、ラクロ、スタンダール、サント＝ブーヴという、女性心理に深い洞察力をもつすぐれた文学者が本物として疑ってさえみなかつた「作品」である。ドイツではリルケが独訳を試みたが、彼もまた真正のものと考えていた。真正説派は先の国王の允許文については、ギユラーグは最後のマドリガルだけの作者ではないのか、と反駁したが、これはやや強引な解釈であろう。一方、贋作説派ではこの五通の手紙を五幕の伝統的な古典悲劇と比較し、手紙の作者は古典悲劇に関する知識は十分に持ち合わせていたが、自身では悲劇を書く力を持っていなかったのではないかと推測しているが、(しかし、前の四編がすつきりとまとまっていな故に(第四の手紙が時間的継起としては第二、第三の手紙に続くものとは言いがたい)そうするためにはかなり論理の無理が生じてしまうだろう)(福井芳男氏)

ともかく現在ではこの『ポルトガル文』はラシーヌ、ボワローと交流のあつたサロンの文学者ギユラーグの作として、彼の他の作品『シャンソン』『ヴァレンタイン』などと合わせて刊行されている。

したがってバルバンの《読者に》で断つてあるような、ポルトガル語からの仏訳は嘘であるということになる。またこの「作品」はポルトガル文学ではなく、フランス文学に属することになる。

もっとも、まったくのフィクションとばかりもいえないかもしれない。作者がマリアナ・アルコフォラドとジャミリーの実際の交わりから着想を得たということもありうる。アダンのソニーニエはその立場をとっている。

やがて、この二人の現実には交わした、作者にヒントをあたえた、真正の手紙なるものが発見されるかもしれない。そうなる今度はこの手紙の真贋が議論されることになるだろう。

『ポルトガル文』の語彙、文体、主題についての分析はここでは触れない。

訳出にあたって佐藤春夫訳を参考にしたかったけれども入手することができなかった。わが国ではこれが唯一の邦訳である。誤訳が多いことだが、未見のためなんとも言えない。

原文は——むろんフランス語だが——息の長い、しつこい文章である。まといつくような粘着力がある。また、文章の端々には、自分の表現の効果を窺っているような目が感じられる。作者はずいぶん頭のよい人である。

註

- (1) 『講座英米文学史・小説Ⅰ』（大修館書店一九七一年）二二八頁。ここでは『ポルトガル文』を真正の手紙として扱っている。
- (2) *LETTRES PORTUGAISES* Valentins et autres oeuvres I Ed. Classique Garnier 1962. pp. viiix.
- (3) *id.*, p. x
- (4) *id.*, p. xii.
- (5) *id.*, p. xiv.
- (6) *id.*, p. xv.